

『古語拾遺』訓読文の語法

中 村 幸 弘

はじめに

斎部広成撰『古語拾遺』という文献を通して、大同二（八〇七）年のころ、上奏文は、こういう体裁で書かれていた、というように知ることができる。しかし、それが、どう訓まれていたかを知ることとはできない。神典という制約によってかどうかはともかくとして、その研究は、確かに比較的十分ではなく、それは、広く常識化している^{注1}ところである。

日本語漢字文献といっている、この種の文章について、いわゆる漢文法を適用して訓むことのできるころはあっても、それをもって、すべてが訓めるわけではない。いま、この『古語拾遺』の訓読文を見たとき、その訓読を施してある刊行物が決して多くはないのに加えて、その諸本の間に、異同が多くて大きいのである。

『古事記』は、本居宣長『古事記伝』によるみことな訓みが、現行の訓みのベースとなつて定着している。もちろん、その『古事記伝』にも、その後直ちに、宣長の眼からも訓み改めなければならないところが現れて、それが、『訂正古訓古事記』となつているものようである。『古事記』でさえ、そうであるのに、『古語拾遺』は、正面切つて、その訓みが、「こなされていいない」と紹介される^{注2}のである。訓みが揺れている文献として、公認されているのである。

もともと、上奏文『古語拾遺』は、趣意が読みとればよい文献であつたと見ることも許されよう。そして、その一方では、斎部氏が、自家の職掌を堅持するための家記として保存される文献でもあつたろう。事情のほどはともかく、『日本書紀』のように、訓点を十分に施すなどした古写本の類を見ることができないようである。

したがって、その訓読文は、おのずから、傍訓の類に、さらに限られることになろう。^{注3}そこで、現行の、その多様な訓読文は、大方が、近世以降、『古事記』『日本書紀』、また、『延喜式祝詞』などの同語句や類似語句を手掛かりに訓み下してきているもの、ということになる。ただ、ここ八十年ほどの間に刊行された、僅かな訓読文相互にも、これほどの異同を見ると、その整理だけでもしておくことが必要かと思えてきたのである。

さきごろ、筆者は、周囲のいくつかの事情から、十分な素養もないまま、『古語拾遺』を読む^{注4}（平成十六年／青木紀元監修／中村幸弘・遠藤和夫共著／右文書院）なる一書を刊行してしまった。その訓読本文作成を担当した段階で、その訓読本文決定に先立って、本小稿は執筆されてい

ければならなかったはずなのである。いま、自著の一部に修正の必要が生じるかもしれないことを前提に、小稿の執筆は始まることとなった。いや、既に、修正箇所が見えてきてもいるのである。

× × ×

実は、訓読本文を決定するのに併せて、現代語訳を行い、さらに併せて、語義・語法記事も執筆していた。その作業工程からは、訓読についてのは戻りは許されなく、いくつかは、止むなく、その語義・語法欄に、疑問の言葉を添えて、投げかけておくよりほかないこととなってしまっていた。その一方で、その訓読本文を含めて、諸本の訓読文の校本作成の作業―『諸本対照古語拾遺 本文編』(中村幸弘・南芳公共編／「國學院大學栃木短期大學紀要(第四十一号)」／平成十九年三月発行予定)も進んできていて、それら訓読文の異同から見えてくる語法上の問題点についての整理は、この機会を措いてないところに来てしまっているのである。そういうわけで、なお不備なところ多い段階にはあるが、『古語拾遺』読解に関わる訓読文の問題ある語法について、適宜、取り上げて、それぞれに若干の考察を試みていくこととする。

× × ×

現在も、最も多く、それに拠って読まれている、西宮一民校注『古語拾遺』(岩波文庫黄351／一九八五年三月十八日第一刷)を基底本として、その原文ならびに訓読文と諸本の訓読文とを対校し、その是非を検討していこうと思う。そして、筆者は、既に述べたように、一つの訓読作業を終えてしまっているところから、そこに、みずからの訓読本文も関わってきて、その不適切な点の修正も、小稿のいくつかの小結論になっていくものと思う。

そこで、対照する注釈書本文(基底本を含めて五書)について、以下に、略号と併せて示すこととする。

- | | |
|----|---|
| 校注 | 西宮一民校注『古語拾遺』(岩波文庫) 一九八五年三月 岩波書店 |
| 新撰 | 安田尚道・秋本吉徳校注『古語拾遺・高橋氏文』(新撰日本古典文庫4) 一九七六年七月 現代思潮社 |
| 新講 | 飯田季治著『古語拾遺新講』 昭和十五年五月 明文社 |
| 精義 | 溝口駒造著『古語拾遺精義』 昭和十年九月 中文館書店 |
| 新註 | 池辺真榛著『古語拾遺新註』上下 昭和三年九月 大岡山書店 |

また、その原文・訓読文引用に際して、いわゆる割り注部分については、これを省いて取り扱うこととした。小稿という語法が、一般にいう構文に関係する事項が多いところから、文脈を直ちに見てとるには、その存在が煩わしいと思えたからである。

さらに、その原文・訓読文の問題該当部分の紹介に際して、その所在位置については、西宮校注の段落区分に従った。そして、併せて、拙著『古語拾遺』を読む』の訓読本文に付した、その段落番号を用いて示すこととした。その段落は、便宜的に第一段落から第四十七段落に及ぶものであるが、その番号の記載については、1～47のアラビア数字をもってすることとし、各段落の小見出しは、西宮校注のそれを借りて添えることとした。

なお、また、校本を引用した際、その引用が行末を越えた場合、その略称をさらに約めて、校注―校／新撰―撰／新講―講／精義―精／新註―註とすることとした。

一 使役表現の並立関係

次例は、使役の表現が三組ある、というように受けとめることもできよう。

(1) 更 立 大 蔵、令 蘇 我 麻 智 宿 禰 檢 校 三 蔵、秦 氏 出 納 其 物、東 西 文 氏 勘 録 其 簿。(28・雄略天皇)

右の原文を、西宮校注は、次のように訓読する。

○更に大蔵を立てて、蘇我麻智宿禰をして三蔵を檢校しめ、秦氏をして其の物を出納せしめ、東西の文氏をして、其の簿を勘へ録さしむ。(43ページ)それは、三組の使役の表現が、並立の関係で一文のなかに収められている、というようにもいえよう。その訓読文としての三組の使役の表現は、みごとに「…をして…しめ」「…をして…しめ」「…をして…しむ」と並んでいるが、その原文を見たとき、訓読文の使役の助動詞「しめ」「しめ」「しむ」に相当するのは、「令」字一字なのである。したがって、その一字しかない「令」字の意味するところを受けて、「檢 校 三 蔵」の「檢校」の下にも、「出 納 其 物」の「出納」の下にも、使役の助動詞「しむ」の連用形「しめ」を補読している、というようにいうこともできよう。そこで、まず「檢校しめ」は、「檢校らしめ」でなければならないことになる。漢語「檢校」にある〈引き合わせて調べる〉意^{注4}を、和語「しむ」に当てて、それに「しめ」を添えて訓んだものと解せるからである。ただ、和語「しむ」のなかに、直ちに通う語義は見出だしがたく、〈品物や建物などを管理する〉意の「領る」とみたことになるうか。

そのように、一字の「令」字を、三度にわたって訓読していることになるわけである。しかも、三度に及ぶ並立であるから、対偶ではないが、いわゆる対偶中止法^{注5}の表現に当てはめた場合、その「檢校らしめ」「出納せしめ」は、「檢校り」「出納し」と訓読できるかに思えてくる。いま、最もよく知られている一例「飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて」〈徒然草・一二二〉を借りて確認するならば、「飛ぶ鳥は翼を切られ、籠に入れられて」というはずのところを「飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて」といいえたのが、その、いわゆる対偶中止法の表現であった。

ただ、本用例は、その使役文の被使役者が、一字の「令」字を三度に分けて訓読する、その二者ともに異なるところから、以下のように訓読することはできない結果を招くことになる。

○更に大蔵を立てて、蘇我麻智宿禰をして三蔵を檢校り、秦氏をして其の物を出納し、東西の文氏をして其の簿を勘へ録さしむ。

いうまでもなく、そのように訓読した用例など、見ることはない。それだけでなく、その「令」字を三度繰り返して訓読する姿勢のものは、対

照五書のうち、西宮校注と池辺新註だけであった。他の三者は、「令」字の及ぶ範囲を、「令」：「檢」「校」「三藏」までにとどめて訓読している点で共通している。幸い、「出納」「勘録」とともに、格助詞「を」を上接させる他動詞として訓んでいるところから、文脈に支障はない。

以下に、校本の該当部分を引いておく。

校注 更に大蔵を立てて、おほくら 蘇我麻智宿欄をして そがのまぢのすくね 三蔵を檢校しめ、みつくら 秦氏をして
 新撰 更に大蔵を立てて、おほくら 蘇我麻智宿欄をして、そがのまぢのすくね 三蔵を檢校しむ。みつくら 秦氏を、
 新講 更に大蔵を立てて、おほくら 蘇我麻智宿欄をして、そがのまぢのすくね 三蔵を檢校さ令む。みつくら 秦氏をして
 精義 更ニ大蔵ヲ立テテ、ソカノマヂノスクネ 蘇我麻智宿欄ヲシテ ミツクラ 三蔵ヲ檢校シメ、ハタウザ 秦氏ハ
 新註 さらにおほくらをたてて、そがのまぢのすくねをして みつのくらをしらしめ、はだうちをして、

校 其の物を出納せしめ、あげわらし 東西の文氏をして、やまつかのふみうち 其の簿を勘へ録さしむ。しるふみ
 撰 其の物を出納む。いだしむ 東西文氏、やまつかのふみうち 其の簿を勘録す。しるふみ
 講 其物を出納め、そのものいだしむ 東・西の文氏、やまつかのふみうち 其の簿を勘録す。しるふみ
 精 其ノ物ヲ出シ納レ、ヤマトウザ 東西ノ文氏ハ、ソミ 其ノ簿を勘録ス。しるふみ
 註 そのもののいだしれをつかさどらしめ、やまとかふちのふみうちをして、そのしるしぶみをしるさしめたまひき。

いずれにしても、使役表現の並立関係である。そして、ただ、被使役者が異なるところから、それぞれに「しむ」を添えて訓読しなければならぬことになる。そして、それは、次のような原文を想定して訓読している、ということになる。

○更 立 大蔵、令 蘇 我 麻 智 宿 欄 檢 校 三 蔵、令 秦 氏 出 納 其 物、令 東 西 文 氏 勘 録 其 簿。

× × × × ×
 続いて、さらに一例、使役表現と並立関係とが共起するところがある。

(2) 仍、帰 罪 過 於 素 菱 鳴 神、而 科 之 以 千 座 置 戸、令 拔 首 髮 及 手 足 爪、
 以 贖 之。(8・素神の追放)

右の原文を、西宮校注は、次のように訓読する。

○仍りて、罪過を素戔鳴神に帰せて、之を科するに千座の置戸を以てし、首の髪及手足の爪をも、抜かしめて、之を贖はしむ。(23ペ)

ここもまた、「令」一字を、「抜かしめて」「贖はしむ」というように、二度訓むことになっている。だが、被使役者を示す「…をして」に相当する部分が、この本文には存在しない。ただ、文意としては、それに先行する部分にある「罪過を素戔鳴神に帰せて…」の「罪過を…に帰せ」が(「罪を…にかぶせる」ということで、そこに、使役性ある動詞と被使役者が示されていて、「抜かしめて」と「贖はしむ」との被使役者として、「素戔鳴神をして」を感じとることはできる。そうではあっても、とにかく、「…をして…(せ)しむ」という原則的な使役表現とはならないところにも、使役を意味する「令」字が用いられており、しかも、それが、二動作を受けて使役表現を構成していたのである。そこで、ここに、いわゆる対偶中止の表現を採用するならば、「首の髪及手足の爪を抜きて、之を贖はしむ」と訓読することも考えられなくはないことになる。ただ、被使役者が明示されていないだけに、「抜きて」では、実際の動作者についての理解を誤らせる恐れも生じることになる。池辺新註／安田・秋本新撰／西宮校注が、五書のうち三書が、二動作「抜く」と「贖ふ」とに「しむ」を付けて訓読している。それに対して、溝口精義は、「令」字を「抜く」に付けて、「首ノ髪、及タ手足ノ爪ヲ抜カシメテ」だけとし、飯田新講は、「首の髪及手足の爪を抜きて、以て之を贖はしむ」としている。その飯田新講だけが、さきに見た、対偶中止法を適用していたのである。

以下に、校本の該当部分を引いておく。

校注	仍りて、	罪過を素戔鳴神に帰せて、	之に科するに千座の置戸を以てし、	首の髪、
新撰	仍て、	罪過を素戔鳴神に帰せて、	之を科するに千座置戸を以てし、	及び
新講	仍りて、	罪過を素戔鳴神に帰せて、	之に科するに千座置戸を以てし、	首髪、
精義	仍ツテ、	罪過素戔ヲ鳴神ニ帰セテ、	科スルニ千座置戸ヲ以テシ、	首ノ髪、
新註	かれ	つみをすさのをのかみによせて、	ちくらのおきどをおほせて、	みかしらのみかみ

校	手足の爪をも抜かしめて、	之を贖はしむ。
撰	手足の爪をも抜かしめ、	以て之を贖はしむ。
講	及び手足の爪を抜きて、	以て之を贖はしめ、
精	及タ手・足ノ爪ヲ抜カシメテ、	以テ贖フ。
註	みてあしのみつめをもぬかしめたまひて、	あがなはしめたまひて、

○仍、婦罪過於素、薨鳴神、而科之以千座置戸、令素、薨鳴神、拔首髮及手足爪、以令素、薨鳴神、贖之。

○大伴・来目建^レ杖、開^レ門令^レ朝^レ四方之國、以觀^中天位之貴^上。(19・即位大嘗祭)

新註 おほとも くめ つはものをたててみかどをひらきて、よものくにびとをまるのぼらして

講　貴きをみ観せしむ。

精カシ貴キコトヲ觀ミサシム。

註　　みいづをしめしたまひき。

(3) 遂使二人歷世而弥新、事遂代而變改。(1・序)

右の原文を、西宮校注は、次のように訓読する。

○遂に人をして世を歴て弥新に、事をして代を逐ひて変改せしむ。(13ペ)

右の文の文末の「しむ」は、文中の「新に」をも受けていると見てよいように、対偶中止の表現ということになる。ただ、被使役者が、前者は「人

をして」であり、後者は「事をして」であつて、そのように被使役者が異なつていて、それを対偶中止の表現とすることには躊躇を覚えるのである。そして、その問題については、既に、(1)の用例をどう訓読するかで触れてきたところでもある。

そこで、(1)の西宮校注の訓読に倣うならば、その「新に」は、併せて送り仮名も修正して、「新たならしめ」と訓み改めることにならう。つまり、その一文としては、次のように書き改めることになる。

○遂に人をして代を歴て弥新たならしめ、事をして代を逐ひて変改せしむ。

右のように改訓することで、(1)の訓読と同じ姿勢の、整合性あるものとなつてこよう。ただ、そのように訓読するということは、次のような原文を想定している、ということになる。

○遂 使 人 歴 世 而 弥 新、使 事 逐 代 而 変 改。

右のような原文であつたとしたら、その訓読で悩まされることはならなかつたであらう。しかし、その原文に、後者の「使」字はないのである。その結果、対照五書のなかに、納得いく訓読は、一例もなかつたのである。そうではあるが、校本の該当部分を引いて、それが納得いかないことを確認しておきたい。

校注 遂に人をして世を歴て弥新に、
事をして代を逐ひて 変改せしむ。

新撰 遂に人をして世を歴て弥新に、
事をして代を逐ひて 変改せしめ、

新講 遂に、人をして・世を歴て弥々新に、
事をして・代を逐ひて変へ改め使む。

精義 遂二人ヲシテ世ヲ歴テ弥新ニ、
事ヲシテ代ヲ逐ウテ 変リ改マラシム。

新註 つひにひとをしてよをへていよ、あらたに、 こと よをおひて へむかいせしむ。

自編著もまた、そこを「新たに」としてしまったのだが、いま、「新たならしめ」でなければならなかつた、と反省している。

× × ×

ここに取り立てた使役表現の、その部分は、いずれも、並立関係の部分でもあつた。そして、その訓読の揺れは、その原文の、使役を表す「令」字・「使」字が複数の動詞を受けるものである点に起因するものと見てよいようである。それら原文の「令」字・「使」字は、用例(1)・(2)・(3)に見るように、複数の動詞を受けても、一字をもつて表現するのが一般だったのであろうか。ただ、訓読するとなると、その被使役者が異なるところから、二項から成る、まさに対偶関係であつても、いわゆる対偶中止法による訓読などはできようはずもなく、各書それぞれの訓読を展開してきたもののように思えてならないのである。

二 完了「たり」に訓まれる「所」字

『古語拾遺』の原文を見たとき、完了の助動詞「たり」と訓んできている「所」字の存在に気づかされる。「所」字というと、受身を担う用法が直ちに浮かんでくる。^(注6)が、この『古語拾遺』にあつては、完了の助動詞「たり」に相当する「所」字を、まず見るのである。

(4) 国 史・家 牒、雖 載 其 由、一 二 委 曲、猶 有 所 遺。(1・序)

右の原文を、西宮校注は、次のように訓読する。

○国史・家牒、其の由を載すと雖も、一二の委曲、猶遺りたる有り。(13p)

国史・家牒が、その由緒を載せているけれども、一、二の詳しい内容が、やはり遺漏している点がある、というのである。「遺」字を「もる」と読んで「遺りたる」と訓んだ、その「たる」は、存続といったほうがよい意味を担っていて、その連体形準体法として訓んでいる用例である。「遺りたる」とか、「遺りたるもの」とか、そう解される「遺りたる」である。

その「たる」を、同じ意味を担う助動詞「り」の連体形「る」で訓もうとするものもあつて、むしろ、そちらを多く見たのである。「遺」字を「のこる」と訓んで、池辺新註は「遺レル」とし、そう訓んだうえで「所」字を添えて訓む溝口精義は「遺レル所」としている。安田・秋本新撰は、「遺」字を「あやまつ」として「遺まてる所」と訓んでいる。結局、「所」字を完了の助動詞として受けとめないで、単に「所」のままとしてしまっていた訓みもあつて、それが飯田新註の「遺る所」である。

そのように、それぞれに違う訓みをしているといってもよい、この「所遺」であるが、訓みは異なっているところも、理解しているところは同じである、といえそうである。誤解の余地はない、「所」字の用法である。

既に、それぞれの訓みを紹介したところではあるが、以下に該当部分の校本を引いておくこととする。

校注	国史・家牒、其の由を載すと雖も、一二の委曲は、猶遺りたる有り。
新撰	国史・家牒、其の由略を載すと雖も、委曲を一二、猶遺まてる所有るがごとし。
新講	国史・家牒、其の由を載すと雖も、一二の委曲、猶は遺る所有り。
精義	国史・家牒ハ、其ノ由ヲ載スト雖モ、一二ノ委曲ハ、猶遺レル所有リ。
新註	こくしけでふ、そのよしをのすといへども、ひとつふたつあきよく、なほのこれることあり。

続いて、大方、同じように、問題なく受けとめられている「所」字の用法例を引いていくこととする。

(5) 太 玉 命 所 率 神 名、曰 天 日 鷲 命・手 置 帆 負 命・彦 狭 知 命・櫛 明 玉 命・天 目 一 箇 命。(3・天中の三神と氏祖系譜)

右の原文を、西宮校注は、次のように訓読する。

○太玉命の率たる神の名は、天日鷲命・手置帆負命・彦狭知命・櫛明玉命・天目一箇命と曰す。(15・16ペ)

太玉命が引き連れてきている神の名は、といって、以下に、五柱の神々を紹介するところである。「率たる」の「たる」は、ここも、存続の意を担っているものである。ただ、それに続く「神の名は」の「神」に直ちにかかっていく、連体修飾の連体形である。

したがって、その「ところ」と訓ませる訓読では、「ところの」と訓んで「神」にかかっていくことになる。「たる」と訓んだうえで、「率たる所の」とする安田・秋本新撰、「たる」と訓まないで、「率ある所の」／「率キル所ノ」とする飯田新講／溝口精義ということになって、そのように、ここでは、「ところの」とする訓みが優勢である。

そこで、少々注目したいのは、その「所の」という表現である。その「所の」は、受身の意で用いられてきているものと解されてきている。^{〔注7〕}この(5)の「所」字は、受身を担うものではないが、あるいは、受身・完了の別を無視した助動詞「たる」に訓読したもので、連体修飾関係を構成する場合の、一つの傾向と見てよいものであったのであろうか。

そこで、この部分についても、該当部分の校本を引いておくこととする。

校注	太玉の命の率たる神の名は、	天日鷲命、	手置帆負命、	彦狭知命、
新撰	太玉命の率たる所の神の名を、	天日鷲命、	手置帆負命、	彦狭知命、
新講	太玉命の率ある所の神の名を、	天日鷲命と曰す。	手置帆負命、	彦狭知命。
精義	太玉命ノ率キル所ノ神ノ名ヲ、	天日鷲命、	手置帆負命	彦狭知命
新註	ふとたまのみことのひきあるかみのみなを、	あまのひわしのみこととまをす。	たきはひのみこと、	ひこさしのみこと、

校	櫛明玉命・	天目一箇命	と曰す。
撰	櫛明玉命、	天目一箇命	と曰す。
講	櫛明玉命。	天目一箇命。	
精	櫛明玉命	天目一箇命	ト曰ス。
註	くしあかるたまのみこと、	あまの目ひとつのみこと。	

改めて、それを取り立てることをしなかったが、池辺新註は、「所率」を「ひきある」とするだけで、「所」字を一切受けとめることをしていない。「所」字を敬遠した訓読である。

× × ×

ところが、ここに、この例こそは完了に相当すると思える「所」字を、受身に訓んでいる例に出会ったのである。

(6) 初 度 所_レ 鑄、少 不_レ 合_レ 意。 (7・日神の出現)

そこを西宮校注は、次のように訓読する。

○初_{はじめ}度に鑄_{つく}たるは、少_{いさ}に意_いに合_あはず。 (21p)

思兼神の発案で、神鏡を鑄造させた、あの場面である。最初に鑄造した鏡は、少しばかり意図するところに適さなかった、といっているところ、はつきり完了の意を担っているところである。そこを、溝口精義だけは、「鑄ラレシハ」というように、受身に訓んでいたのである。安田・秋本新撰が「鑄たる」とし、西宮校注に同じく、池辺新註も「は」を添えて「いたるは」としていたところである。飯田新講は、さきの(4)においても(5)においてもそうであったように、「所」字をそのまま「所」として、つまり、「ところ」と訓んでいて、同書の「所」字の訓みについての姿勢が見えてくる。例によって校本を引いておくこととする。

校注 初_{はじめ}度に鑄_{つく}たるは、少_{いさ}に意_いに合_あはず。

新撰 初_{はじめ}めの度_{たび}に鑄_{つく}たる、少_{いさ}に意_いに合_あはず。

新講 初_{はじめ}度に鑄_{つく}る所、少_{いさ}か意_いに合_あはず。

精義 初_{はじめ}ノ度_{たび}ニ鑄_{つく}ラレシハ、少_{いさ}カ意_いニ合_あハズ。

新註 はじめにいたるは、すこしくみこ、ろにかなはず。

右に続いて、まったく同じ「所_レ鑄」が現れる。用例番号も施さないで、その原文と校本とを引いておく。

○次 度 所_レ 鑄、其 状 美 麗。 (7・日神の出現)

校注 次_{つぎ}度に鑄_{つく}たるは、其_{その}の状_{かたち}美麗_{うつく}し。

新撰 次_{つぎ}の度_{たび}に鑄_{つく}たる、其_{その}の状_{かたち}美麗_{うつく}なり。

新講 次_{つぎ}度に鑄_{つく}る所、其_{その}の状_{かたち}・美麗_{うつく}はし。

精義 次_{つぎ}ノ度_{たび}ニ鑄_{つく}ラレシハ、其_{その}ノ状_{かたち}美麗_{うつく}シ。

新註 つぎにいたるは、そのかたちうるはしかりき。

溝口精義だけが、(6)において、「所_レ鑄」を「鑄ラレシハ」と訓んでいたことを十分に確認したうえで、他に、受身に訓まれている「所」字を

追つてみたが、実は、その溝口精義をも含めて、その用例を見ることがなかったのである。「ゆ」を用いて「いはゆる」と訓む「所謂」(5「素神の天罪」に見る用例を始めとして五用例を数える)に含まれる、その受身は別として、少なくとも、「る」「らる」を用いた受身に訓んだ用例をまったく見ないのである。「所」字を「る」「らる」と訓む用例を見ないことが、正直なところ、恥ずかしいことに、驚きだったのである。

× × ×

完了の助動詞として理解していくことのできる「所」字を、「たり」「り」、また、「ところ」と訓んできている箇所というと、それは、第三十五段落から始まる「所遺」を述べる十一段落に集中する。その第三十五段落を「所遺一也」として、第四十五段落の「所遺十一也」にまで続く、その十一の「所遺」の訓みである。そして、その「所遺」は、冒頭の第一段落において見てきたところでもある。

以下に、念のため、第三十五段落の、該当する原文だけを引き、続いて、その部分の校本を引いて確認することとする。

(7) 而、久代 闕 如、不 修 其 祀。所 遺 一 也。(35・遺りたる一)

校注	而るに、	久代闕如して、	其の祀を修めず。
新撰	而るを	久代より闕如して、	其の礼を修めず。
新講	而るに	久代より闕如にして	其の礼を脩めず。
精義	而るに	久代ヨリ闕如シテ、	其ノ礼ヲ修めず。
新註	而	ひさしくもれて、	そのゐやわざをなさず。のこることひとつなり。

そこで、この一段落において述べようとしているところを観察すると、草薙の神剣を祭る熱田宮に対しては国家の名において敬意を表して当然であるのに、国家がそれを漏らしていることを非難している、ということが出来る。国家が幣帛を奉る諸社のリストに熱田宮が漏れていることが、その不満の一として取りたてられている段落なのである。したがって、その「所遺」は、その一段落の流れからは、(「もらされたる」とか、(「わすれられたる」とか、読みとれてきてしまうのである。その校本の諸訓「遺りたる」「遺れる」「遺てる」は、(「遺らされたる」(「遺されたる」(「遺たれたる」というように読みとれてしまふのである。

あるいは、上代の漢字文献を取り扱う世界では、極めて常識的な事項であるのかもしれないとは思いますが、「たり」「り」など、完了の助動詞で訓んできている「所」字に、さらには、そのまま「ところ」と訓んできている「所」字にも、受身の意味があるものといっておく必要があるように思えてきたのである。上代語に、助動詞「らる」が存在しないことや、「る」もまた、受身の用例が限られることは、広く認識されているところである。そして、受身という発想が外来のものであることも、これまた、広く、感じとられている(注8)ように思える。

中国文に倣って、「所」字をそこに用いていても、訓読においては、「たり」や「り」、また、「ところ」としてきてしまっていた、というように思えてきたのである。すると、(6)において、「所」を「鑄ラレシハ」と訓んだ溝口精義が、勇気ある新訓だった、というように感じとれてもくる

のである。そして、これまでに引いてきた、「たり」「り」ところ」と訓まれてきている、それら「所」字は、現代人としては、受身で読みとっていきたくいように思えてくるところでもあるのである。受身表現を知った者としては、そう読みとっていきたくなる「所」字の部分なのである。

× × ×

『古語拾遺』には、もちろん、場所や、それに類する意味を担う名詞として用いられている「所」字、また、形式名詞と認めたい「所」字もあろう。さらに、尊敬の補助動詞「ます」や尊敬の助動詞「す」に訓まれている「所」字もあるかもしれない。小稿としては、それらについての検討は、しばらく措くとしても、完了の助動詞「つ」に訓まれている「所」字についてだけは、何としても、触れておかなければならぬ。

(8) (以) 所 顯 神 名 為 氏 姓。(13・天孫の降臨)

右の原文は、いわゆる注記として書かれている部分である。その訓読文について、以下に、校本を引いて紹介する。

校注 顯しつる神の名を以て 氏姓と為り。

新撰 神の名を顯せる所を以て 氏姓と為す。

新講 所顯つる神の名を以て 氏姓と為す。

精義 顯ス所ノ神ノ名ヲ以テ 氏姓トス。

新註 このかみのみなをあらはせるゆゑにかばねとなりき。

その本文は、天鈿女命が、猿女君の遠祖であることを解説しているところである。どうして猿女君というのかを解説しているところである。天孫降臨の昔、その天孫のご一行がお通りになる道にいた道祖神に、ご一行中の天鈿女命が、その名を問ひ質すと、猿田彦大神と答えた。そこで、その天鈿女命の子孫は、天鈿女命によって公表された男神の名である「猿」を使って、「猿女」とした、といっているのである。

「顯」字を、他動詞「あらはす」と訓むと、同じ完了の意を表すにしても、助動詞としては、「つ」が付きやすかったのであらうか。そして、そこは、天鈿女命が公表させた、というようにも、天鈿女命によって公表させられた、というようにも、いずれにも読みとれるところなのである。

とにかく、この「所顯」部分、飯田新講に「所顯つる」とあり、西宮校注が「顯しつる」と訓んでいること、ここに、はっきりと示しておきたい。

× × ×

いま、また、恥ずかしいことに、「所」字の字義に、完了の意味があったのか、なかったのか、確認することができない。少なくとも、現行の漢和辞典の類を見ても、その、完了の字義を載せてくれてあるものがない。一方、古訓を載せてくれてある、例えば、『角川大辞源』などからは、「タリ」と訓まれていたことを確認することができる。(注9)

「所」字を「タリ」と訓んでいた、上代・中古の先人は、何を意味する「タリ」として訓んでいたのであらうか。中国産の漢籍のなかにも、そう訓むところがあったのであろうか。あるいは、日本の漢字文献を訓む際にだけ行われていたことなのだろうか。

「タリ」と訓まれている、『古語拾遺』の「所」字は、おおかた、受身に解することができそうに見えるが、それは、下に来る動詞の表す行為の対象を示す^(注10)ものとも考えられなくない。ただ、現行の漢和辞典の「所」字の字義に、完了の意味を見ることは、どうしてもできないのである。あるいは、現代中国語のなかに見られる、〈すっかり〉という意味の副詞用法のものが、そこに結びつくのであろうか。^(注11)

三 補読される敬語

上代の漢字文献においては、敬語補助動詞の類を、適宜、補って訓み添えることが行われてきている。それは、後世の読者である、その訓読文著作者の、登場人物に対する評価が、そうさせているものと解することができる。

次の原文には、その述語動詞「議」に、敬語の補助動詞など、まったく添えられていない。高皇産霊神の動作をいつているところである。

(8) 高 皇 産 霊 神、会 八 十 万 神 於 天 八 湍 河 原、議 奉 謝 之 方。

直ちに、右の原文の、訓読文の校本を見ることとする。

(6・日神の石窟幽居)

校注 高皇産霊神、八十万の神を 天八湍河原に会へ、謝み奉らむ方を議らふ。

新撰 高皇産霊神、八十万神を 天八湍河原に会へ、謝り奉らむ方を議らふ。

新講 高皇産霊神、八十万神たちを天八湍河原に会へて、謝み奉るべき方を議り給ふ。

精義 高皇産霊神、八十万ノ神ヲ 天八湍河原ニ会ヘテ、謝リ奉ラム方ヲ議リタマフ。

新註 たかみむすびのかみ、やそよろづのかみをあまのやすかはらにつどへたまひて、いのりたまはむさまをはかりたまひき。

そのまま訓読するのであるならば、「議らふ」でしかないというところを、飯田新講が「議り給ふ」とし、溝口精義も「議りタマフ」と訓み、池辺新註は「はかりたまひき」というように、尊敬の補助動詞「たまふ」を添えて訓んで、三者とも、高皇産霊神への敬意を表している。

その、同じ段落には、天照大神も登場している。その原文は、大神が、石窟に幽居されたところである。

(9) 于 時、天 照 大 神、赫 怒、入 于 天 石 窟、閉 磐 戸 而 幽 居 焉。

右の原文についても、直ちに、その訓読文の校本を引いてみることにする。

校注 時に、天照大神、赫怒りまして、天石窟に入りまし、磐戸を閉して幽居りましき。

新撰 于時、天照大神、赫怒で、天石窟に入りまし、磐戸を閉し、而て幽居したまへり。

新講 時に、天照大神、赫怒りまして、天石窟に入りまして、磐戸を閉して幽居しぬ。
 精義 時二、天照大神、赫怒ツテ、天ノ石窟ニ入りマシ、磐戸ヲ閉シテ幽居リマシヌ。
 新註 そのときに、あまてらすおほみかみ、いかりまして、あまのいはやにいりまし、いはとをたててこもりましぬ。

右の本文では、a「赫怒」・b「入」・c「閉」・d「幽居」の四か所に、大神の動作が描写されていることになる。そのうち、b「入」については、訓読文全五書ともに、尊敬の補助動詞「ます」を添えている。一方、c「閉」については、全五書とも、一切の敬語補読を行っていない。a「赫怒」については、溝口精義が、そのまま「赫怒ツテ」だけであるのに対して、他の四書は、すべて、尊敬の補助動詞「ます」を添えている。最後の、d「幽居」においては、他の四書が「ます」を用いて尊敬の意を添えているのに対して、安田・秋本新撰だけが、同じ尊敬の補助動詞でも、「たまふ」を用いて尊敬表現を構成している。

全五書ともに、上代語として受けとめられる「ます」のほうに、敬意の高さを意識して使い分けていたものと見えてくる。天照大神と高皇産靈神とを、遇し分けているものといえる。ただ、大神の動作でも、d「幽居」を、安田・秋本新撰が「幽居したまへり」としているのは、完了の助動詞「り」によつて完了の表現を構成しようとしたからかにも思えてくる。とにかく、訓読にあたって、尊敬と完了とを共起させた表現として、「…たまへり」が採用された、ということである。もちろん、補助動詞「ます」も、完了の助動詞「り」を下接させることはできる。聖書の和訳にある「主は来ませり」の「…ませり」である。そうではあっても、新撰は、というより、新撰が採用した訓読文は、「…たまへり」が、尊敬・完了の表現として定着していたのであろう。

× × ×

次の原文についての、その訓読文には、幾つかの異同が認められるが、ここでは、補読敬語として、同一動作を表す動詞に、尊敬語を補うものと謙譲語を補うものとが見られる点に注目していくこととする。

(10) 伊 契 諾・伊 契 冉 二 神、共 為 夫 婦、生 二 大 八 洲 国、及 山 川 草 木。次、生 二 日 神・月 神。最 後、生 二 素 戔 鳴 神。(2・天地開闢)

右の原文のなかには、a・b・cの、三字の「生」字がある。その三字の「生」字とともに、その校本を見たとき、敬語の補助動詞を訓み添えている。そこで、その校本を掲げることとする。

校注	伊契諾・伊契冉の二はしらの神、共為夫婦たまひて、	大八洲国、及山川草木を
新撰	伊契諾・伊契冉二一神、	大八洲国及び山川草木を
新講	伊契諾・伊契冉の二はしらの神、共為夫婦	大八洲国及び山川草木を
精義	伊契諾・伊契冉二バシラノ神、夫婦ト共為リテ、	大八洲ノ国ト山・川ト草木トヲ

新註 いざなぎいざなみふたはしらのかみ、みとのまぐはひしたまひて、おほやしまのくにたまのかみ、またやまかはくさきのかみを

校 生みます。次に、日の神・月の神を生みます。

最後に、素戔鳴神を生みます。

撰 生れます。次に、日神・月神を生みます。

最後に、素戔鳴神を生れます。

講 生み給ふ。次に、日神・月神を生みまつります。

最後に、素戔鳴神を生みまつる。

精 生ミマシ、次ニ、日ノ神ヲ生ミマシ・次二月ノ神ヲ生ミマシ、最後ニ、素戔鳴神ヲ生ミマシキ。

註 うみまし、つぎに ひのかみ つきのかみをもあれましき。いやはてに すさのをのかみをあれましつるに、

aの「生」字については、飯田新講が「給ふ」を補読している以外、他の四書は、いずれも、「ます」を補読している。ただ、安田・秋本新撰が、その「生」字を、ラ行下二段に活用する「ある(生る)」と訓んでいる。そのラ行下二段動詞「生る」は、自動詞しか考えられないのだが、その「生る」に上接する格助詞が「を」であって、いよいよ理解に苦しむ訓読文である。ここには、尊敬の補助動詞の問題だけでなく、追って取り立てるようになる、自動詞に訓むか他動詞に訓むかの問題や、動詞が要求する格助詞の問題も含まれているのである。

それにしても、aの「生」字に、安田・秋本新撰は、どうして「…を生れます」の訓みを採用したのであろうか。bの「生」字については、「…を生みます」と訓んでいるからである。しかも、cの「生」字については、再び「…を生れます」と訓んでいるからである。そして、それに先立って、池辺新註が、まさに、その先輩ということができ、aの「生」字を「…をうみまし」とし、b・cの「生」字を「…を(も)あれましき」／「…をあれましつるに」としていたのである。結局、だれを高めようとしているのか、a・b・cの「生」字に添える敬語補助動詞を、すべて変えて訓んでいるのが、飯田新講である。aの「生」字は、「生み給ふ」と訓んで、お生みになった伊奘諾・伊奘冉二神を高めている。bの「生」字は、「生みまつります」という、謙譲の補助動詞「まつる」と尊敬の補助動詞「ます」とを重ねて、二方向への敬語を構成して訓んでいる。伊奘諾・伊奘冉の二柱の神が日の神・月の神を生みもうしあげなざる、ということ、日の神・月の神への敬意を「まつり」で、伊奘諾・伊奘冉の二神への敬意を「ます」で表していることになる。cの「生」字については、「素戔鳴神を生みまつる」というように、謙譲の補助動詞「まつる」だけを添えて訓んでいて、素戔鳴神への敬意を表すだけで、伊奘諾・伊奘冉の二神を無視していることになるのである。

『古語拾遺』の訓読文に見る補読敬語については、拙著『古語拾遺』を読むのなかに、岩井護氏「『古語拾遺』の補読敬語」なる論考^(注12)が収録されている。ついて見られるようお奨めして、本節は、以上をもって攔くこととする。

ただ、本節で取り立てた、この補読敬語の問題は、第五節の自動詞・他動詞の問題とも関係するところとなる。あらかじめ予告しておく。

四 補読される受身・使役の助動詞

すでに、第二節において、校本に採用した全五書が、こぞって「所」字を「る」「らる」と訓んだ用例を見せないことを確認してきている。いま、その受身の助動詞を、補読として用いている用例を見ることができたのである。

以下、その補読部分に「る」「らる」を用いる、その原文を、まず掲げることとする。

(9) 其 草 薙 劔、今 在 尾 張 国 熱 田 社。未_レ叙_二礼 典_一也。(24・景行天皇)

右は、景行天皇の御代、日本武命が、東方の南蛮を平定後、尾張の国に帰ってきて、宮簀姫と結婚、その後、胆吹山で毒氣に当たって薨去、そこで、草薙の劔が、現在、熱田社にあるのだ、という記事の末尾部分である。その熱田社が国家の祭典に関与するものになっていない、その不満を述べているところである。

問題は、その「叙」字がどう訓まれるか、である。例によって、その部分の校本を引くこととする。

校注 其の草薙劔は、今 尾張国^{あつりのくに}の熱田社^{あつたのやしろ}に在り。未だ礼典^{まつりののり}に叙^{つづ}てられず。

新撰 其の草薙劔は、今 尾張国^{あつりのくに}の熱田^{あつた}の社^{のやしろ}に在り。未だ礼典^{まつりののり}を叙^{つづ}です。

新講 其の草薙劔は、今、尾張国^{あつた}の熱田^{あつた}の社^{のやしろ}に在^ます。未だ礼典^{まつりののり}を叙^{つづ}です。

精義 其ノ草薙劔ハ、今 尾張ノ国熱田社ニ在リ。未ダ礼典^{まつりののり}ヲ叙^{つづ}デズ。

新註 そのくさなぎのつるぎは、いま をはりのくににあつたのやしろにあり。いまだらいでむをついでず。

その「叙」字は、「つぎつ」という動詞に訓まれる漢字である。(順序立てる・秩序立てる)意を表し、その第二音節がイ音になると活用語尾が濁音化して、「ついで」ともいわれてきている。池辺新註や、安田・秋本新撰、また、溝口精義も、その「ついで」で訓んでいる。飯田新講は、第二音節はそのまま、語尾を濁音化させた「つぎつ」で訓んでいる。そのような異同はあっても、それら四書とも、直ちに打消の助動詞「ず」に繋がって、想定される動作主「国家」が、その熱田社を国家の祭典に順序立ててくれないと、愁訴している文脈というように読みとれる。

それらに対して、西宮校注だけが、その「叙つ」の下に、受身の助動詞「らる」を補ったうえで、打消の助動詞「ず」に繋げて打ち消しているのである。そのようにして、「叙てられず」と訓んでいるのである。したがって、そこに想定される、意味上の主語は、「熱田社は」ということになっている。それは、次のように読んでいる、ということになる。

○〔熱田社は〕主語
未だ_二礼典_一に_二述語_一叙てられず。

そして、その西宮校注の読み以前は、次のように読まれていた、ということになるのである。

○「国家は」「熱田社」を「未だ」「礼典」に述す。

長きにわたって、主語として想定されていたものは、「国家」であって、その本文には現れていない概念である。本文に現れている、前文の「熱田社」、それは、この一文においては、動作の対象に相当するものとして想定されてきていたのであるが、西宮校注は、それを主語の位置に移して想定してしまったものか、と思えてきたのである。無生物主語の受身、いわゆる非情の受身^{〔注13〕}は、必ずしも全面的に外来の受身ではないにしても、とにかく、近現代人が積極的に使うようになってしまっている受身表現である。

その「熱田社は」未だ礼典に叙せられず」という訓読は、現代人には受けとめやすい構文となっていたのである。筆者もまた、その理解しやすさに惹かれてしまった一人であった。加えて、〈まだ、国家の祭典に順序立てて並べられていない（＝関与していない）〉と、現代語訳までしてしまっていたのである。

日本古典語の発想は、受身表現を、とりわけて非情の受身表現を、やはり、好まない姿勢のものであった。西宮校注に先行する、他の四書が、こぞって「国家は」「熱田社に」未だ礼典を叙せず。」と訓んでいるのは、日本古典語の構文を遵守していた、ということになる。

× × ×

次文にも、その箇所を、諸訓が、受身に訓んだり、訓まなかったりするところがあって、続いて検討していくことにしたい。

(10) 其 事 雖 不 行、猶 所 載 官 例、未 見 刊 除。(45・遺りたる十二)

そこで、これも、西宮校注の訓読を、まず引くこととする。

○其の事行はれずと雖も、猶官の例に載する所にして、未だ刊り除かれず。(53ペ)

実は、右の傍線部の受身の助動詞の検討に先立って、「其の事行はれず」という受身表現について確認しておきたい。続いて紹介することにするが、「其事雖不行」の部分については、対照五書とも、その訓読に異同はないのである。

その部分は、上記の勅令、つまり、左弁官の口宣が、そのとおりに実行されていないとはいっても、ということである。そこで、その「行はる」という表現だが、それは、権威ある立場で、行事や政令を（実行する）関係を描写する場合に、その行事や政令を主体に据えて「行はる」と表現する用例を、時に見てきているように思えてきたのである。具体的には、「…仁王会など行はるべしと…」（源氏物語・明石）／「…月ごとの十四、五日つごもりに行はるべき普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をばさるものにて…」（源氏物語・総角）などが、それである。とにかく、ここ、第四十五段「遺りたる十二」のその部分は、諸訓こぞって、「其の事行はれずと雖も」だったのである。

その諸訓を、以下に引いておく。

校注 其の事行はれずと雖も、

新撰 其の事行はれずと雖も、

新講 其事、行はれずと雖も、

精義 其ノ事行ハレズト雖モ、

新註 そのことおこなはれずといへども、

そこで、いよいよ、「未見刊除」部分を見ていくこととする。ただ、受身に訓むものと、訓まないものがある、といっても、この(10)の原文には、「見」字がそこにあつて、(9)の原文のように、受身を表す文字がないものとは、そもそもが違うのである。その違いに注目したとき、受身を表す「見」字が原文にあるのだから、ここでは、むしろ、「見」字を無視して読まない訓読のほうに考察の焦点を置かなければならないようにも思えてくることになる。その部分の校本は、次のとおりである。

校注 猶 官の例に載する所にして、未だ刊り除かれず。

新撰 猶 官例に載する所、未だ刊除たるを見ず。

新講 猶は 官例に載する所、未だ刊り除てず。

精義 猶 官例ニ載スル所、未ダ刊リ除カレズ。

新註 なほ くわむれいにのせらるるところは、いまだけづりのぞかれず。

西宮校注は、池辺新註や溝口精義を受けて、「未だ刊り除かれず」と訓んでいるものと受けとめてよからう。そのように、「除」字を「のぞく」と訓んで受身表現とする、上記三書に対して、飯田新講と安田・秋本新撰とは、「除」字を「すつ」と訓んで、受身表現を採用していない。新撰は、「見」字を動詞として、とにかく訓んでいるが、新講は、それをも無視して、「未だ刊り除てず」とするだけである。

この原文と、各訓読文との関係は、どう受けとめていったらよいのであろうか。原文には「見」字があつても、それを受身の助動詞とは認めない新講や新撰は、「未だ刊り除てず」の主体を、次のように想定して訓んでいたことにならう。

○〔国家は〕猶 官例に載する所〔ヲ〕 未だ 刊り除てず。

それに対して、新註や精義に倣った校注は、口宣を主体として想定していたことにならう。

○〔口宣は〕猶 官例に載する所〔ニシテ〕 未だ 刊り除かれず。

原文には「見」字があるのだから、受身文に訓んだ訓読文のほうが、原文に忠実である、ということができそうである。しかし、日本古典語の発想という視点から、その訓読を再考したとき、受身文としなかった訓読文のほうに、とりわけて、新講の訓読に惹かれるところを覚えるのである。中国伝来の受身文の発想を拒否した訓読というようににも思えてくるのである。究極の、伝統的日本語文を意識している読者には、その『古語拾遺』の原文、斎部広成の日本語文を越えて、いつその古代日本語文として訓めてきてしまうのではないかと、そう思えてくるのである。

それにしても、「未見刊除」について、新註は、「くわむれいにのせらるるところは」というように「は」を添えて訓んでいるので、それを主題として提示しようとしているようにも思える。精義も、そのように読もうとしているようにも見えてくる。また、校注が「官の例に載する所にして」としている、その部分は、資格を示す「トシテ」として訓んでいこうとしているようにも見えてくる。その「にして」は、断定の助動詞「なり」の連用形「に」に接続助詞「して」の付いたものではあるが、単なる断定の中止法という働きだけではなく、逆接とも、また、資格を表そうとしているかにも見えてくるのである。それらはともかくとして、受身文として訓むかどうかは、各訓読文が悩むところであつたようである。

「使」字・「令」字、また、「教」字・「遣」字等がなくて、使役の助動詞「しむ」を添えて訓むところがある。そこで、その原文から紹介していくこととする。

(11) 一、昔 在 神 代、大 地 主 神、嘗 田 之 日、以 牛 穴 食 田 人。(46・御歳神)

右の原文を、西宮校注は、次のように訓読する。

○一いは、昔在、神代に、大地主神、田を営る日に、牛の穴を以て、田人に食はしめき。(53ペ)

右の原文には、いわゆる使役の助動詞に相当する漢字は、確かにない。しかし、その「食田人」の上に使役の対象に相当する「以牛穴」が示されているので、「食」字そのものが、使役動詞とでもいったらいいものになっているのである。したがって、その「食」字の訓みに関しては、諸書の間に異同はない。

校注	一いは、	昔在	神代に、	大地主神、	田を営る日に、	牛の穴を以て	田人に食はしめき。
新撰	一	昔在	神代に、	大地主神、	田を営る日、	牛穴を以て	田人に食はしむ。
新講		昔在	神代に、	大地主神、	田を営る日、	牛穴を以て	田人に食はしむ。
精義	一、	昔在	神代に、	大地主神、	田ヲ営ルノ日、	牛ノ穴ヲ以テ	田人ニ食ハシム。
新註	むかし	かみよに	おほつちぬしのかみ、	たつくりますときに、	うしのし、	を以て	たびとにくはしめたまひき。

以上は、「しむ」に相当する漢字がないのに、使役の助動詞「しむ」を添えて訓んでいる用例、ということで取り立てた次第である。

× × ×

「る」「らる」／「す」「さす」「しむ」の類、つまり、受身・使役の助動詞が、時枝誠記の文法観では、助動詞として取り扱われないこと、^{〔注14〕} 広く知られているところである。そして、それら、一般には助動詞とされる「る」「らる」／「す」「さす」「しむ」が、時枝文法にあつては接尾語として取り扱われること、これも、また、よく知られているところである。さて、その時枝理論と直ちに通うものではないかもしれないが、漢文訓読において、受身・使役の助動詞を補読することは、時に見られるところである。具体的には、「屈原既放、遊於江潭、行吟泽畔。」（屈原『漁父辞』の「放たれて」の「れ」や「伝一郷秀才觀之。」（王安石『臨川先生文集』の「觀しむ」の「しむ」である。それから、中国産の古代中国文の訓読に対して、本節において取り立てたところは、日本産の漢字文献のなかに見た、その問題だったのである。

五 自動詞で訓むか、他動詞で訓むか

同一漢字が、自動詞としても他動詞としても訓むことのできる語例は、改めて、その自動詞・他動詞の組み合わせ例を紹介するまでもないところである。それほどに多い、自動詞・他動詞の対応であるが、漢字文献『古語拾遺』の訓読文を見たとき、語幹を同じくして、そこを自動詞で訓むか他動詞で訓むかで悩まされる用例は、さして多いものではなかった。

その一組として、「為」字を、他動詞「なす」と訓むか、自動詞「なる」と訓むかの用例について見ていくこととする。

(12) (古語、麻謂之総。今為上総・下総二国、是也。) (17・造祭祀の斎部)
右の原文は、いわゆる割り注部分である。西宮校注は、それを一行に書き改め、「」に入れて示している。右は、それを、そのまま引いたものである。

その、右の原文を、その西宮校注は、次のように訓読している。

○ (古語に、麻を総と謂ふ。今上総・下総の二国と為す、是なり。) (34ペ)

原文の「為」字を、ここでは、そのように、他動詞「為す」として訓んでいる。しかし、直ちに、だれしもが、自動詞「為る」でも訓んでいけると氣づくはずである。そこで、校本によって、諸訓がどういう実態かを確認することとする。

校注	(古語に、麻を総と謂ふ。今上総・下総の二国と為す、是なり。)
新撰	(古語、麻を之総と謂ふ。今上総・下総の二国と為す、是也。)
新講	(古語に、麻をば之を総と謂ふ。今上総・下総の二国と為す、是なり。)
精義	(古語ニ、麻ヲ総ト謂フ。今上総・下総ノ二国ト為ルハ、是レナリ。)
新註	(ふることにあさをふさといふなりいまかみつふさのくにしもつふさのくにのふたくなれるは、これなり。)

自動詞「為る」で訓むのは、池辺新註と溝口精義とで、それは、上総・下総の二国が、すでにその状態に達しているものとして受けとめている態度の表現というように読みとれる。殊に、新註の「(と) なるる(は)」は、存続の助動詞「り」の連体形「る」を付けているだけに、その印象が強い。それに対して、他動詞「なす」と訓む飯田新註と安田・秋本新撰、そして、西宮校注は、上総・下総の二国に、その後は、そのように二国に分割したという、意志的行為の結果を示そうとする表現というように読みとれる。

「為る」と「為す」とのいずれであろうと、それほど大きな差違あるものとはなっていないであろうが、そうではあっても、どう訓んだかには、その読み手である著者の理解の姿勢と関わりところあるものではあろう。

動詞としての「為」字は、次の原文にも現れる。天照大神と高皇産靈神とのご命令を受けて宝基(「天照大神の系統を受け継ぐ天皇の位」)を守護する役が決まる経緯を述べているところである。

(13) 或 承^ニ 皇 天 之 嚴 命、為^一 宝 基 之 鎮 衛。(34・歴史の回顧)

皇天の嚴命を承けているのだから、宝基の鎮衛は、おのずから決まっていくように思える。それでも、すべてが、自動詞「為る」で訓んでいるわけではない。例によって、校本を借りて紹介する。

校注	或いは皇天の嚴しき命を承け、宝基の鎮衛と為る。
新撰	或は皇天の嚴 命を承り、宝基の鎮衛と為たり。
新講	或は皇天の嚴命を承りて、宝基の鎮衛と為り、
精義	或ハ皇天ノ嚴シキ命を承リテ、宝基ノ鎮衛と為リ、
新註	あるはかむろぎかむろみのみことのみことたりて、おほみやをまもりつかへまつり、

池辺新註は別として、その「為」字を、安田・秋本新撰だけは、他動詞「為す」と訓んでいたのである。だが、そうした、と解釈しようとするのであろうか。

既に、用例(8)として引いた(13・天孫の降臨)のなかに見る「為」字については、池辺新註が「…となりき」であったのに、溝口精義は「…トス」、飯田新講も安田・秋本新撰も「…と為す」、そして、西宮校注が「…と為り」としているのである。引用の格助詞「と」を受ける、この種の「為」字は、そのように、極めてしばしば、自動詞にも他動詞にも訓まれているのである。

× × ×

「遷」字は、常用漢字表では、(セン)という音だけの漢字である。ただ、現行の国語辞典が立項する「遷」字は、(セン・うつる)を掲げるものが多い。^(注15) 自動詞「うつる」も他動詞「うつす」も、いずれにしても表外の訓であるが、「遷都」「遷宮」など、他動詞「うつす」のほうが多いようにも感じられて、その理由が見えてこない。もちろん、「変遷」は、自動詞「うつる」である。「左遷」は、現代人には他動詞「うつす」と受けとめられ

そうだが、漢語としての成立からは、〈左に遷る〉という、自動詞「うつる」なのであろうか。

その「遷」字が、敬語補助動詞「座」字を伴って、しかも、「令」字を用いた使役文のなかに現れる。次の原文に見る用例である。

(14) 爰、令^レ天手力雄神引^レ啓其扉、遷^中座神殿^上。(7・日神の出現)

こゝも、また、西宮校注の訓読文を引いてみることにする。

○爰に、天手力雄神をして其の扉を引き啓け、神殿に遷し座さしむ。(21・22 べ)

そこで、右の訓読文に従ったとき、そこは、天手力雄神に命じて神殿にお遷しになるようにさせる、ということになって、その「座す」という尊敬の補助動詞は、天手力雄神に向けて用いられていることになってくるのである。思兼神がそうさせるわけだが、敬意を払う対象が、天手力雄神か天照大神か、悩むまでもないことのようにも思えてくるのである。

そこで、さらに続いて、この部分の校本を見てみることにする。

校注	爰に、 天手力雄神をして 其の扉を引き啓け、 神殿に遷し座さしむ。
新撰	爰に、 天手力雄神をして 其の扉を引き啓け、 神殿に遷座。
新講	爰に、 天手力雄神をして、 其の扉を引き啓け、 神殿に遷座しまつる。
精義	爰二、 天手力雄神をして 其の扉を引き啓け、 神殿に遷座シマツラシメ、
新註	ときに あまのたちからのかみ、そのみとをひきあけて にひみやにうつしまさしめたまひき。

その各訓読文は、その「遷」字についていえば、そのすべてが〈うつす〉と訓んでいたのである。ただ、「座」字を含めて、つまり、「遷座」を〈うつす〉と訓んでいて、「座」字を尊敬の補助動詞と見ていたのは、さらに「しめたまひき」を添えて読む池辺新註を除いて、その校注だけだったのである。校注の姿勢が、読者である筆者にも及んでしまっていた「座」字について、尊敬の補助動詞以外、考えられなくなってしまうていたのである。ところが、その一方で、溝口精義も飯田新講も、さらに安田・秋本新撰も、みな、謙譲の補助動詞の「まつる」や「たてまつる」を添えて訓んでいたのである。そう訓むとなると、お遷しもうしあげさせとか、お遷しもうしあげとかいう、客体に相当する天照大神への敬意の表現ということになってこよう。ただ、新註だけは、「うつし」に尊敬の補助動詞「まさ」を添え、「令」字に返ってか、使役の助動詞「しめ」と、さらに、それに尊敬の補助動詞「たまふ」を付けているのである。その「うつしまさしめたまひき」は、「まさ」で、天手力雄神への敬意を表し、「たまひ」で、そうさせる思兼神への敬意を表していたのである。

筆者は、「座」字を尊敬の補助動詞と思いこんでしまったために、「遷」字のほうを、天照大神の行為をいうように訓もうと思って、自動詞「うつる」にして、「遷り座さしむ」としてしまっていたのである。いまは、精義が穏やかかと思っている。

自動詞で訓むか、他動詞で訓むかは、そこに補読される敬語補助動詞の問題とも大きく関わっていたのである。いや、それらに先立って、「遷」

字に続く「座」字の働きを、どう解するか判断が必要だったのである。「遷座」で、一語の動詞だったのである。

× × ×

語幹を同じくして語尾で別れる自動詞・他動詞のように、対応関係が鮮やかに見えるものではなくて、同一漢字を、ある自動詞で訓む一方で、関連性の見えない他動詞でも訓んでいる、というようなところにも出会うこととなった。いや、具体的には、大方が他動詞で訓んでいるところを、一方では、結果的に自動詞で訓んでいるものもあった、ということなのである。

次の原文の、第二文の冒頭の二字「誕育」の訓みに注目していこう、というのである。

(15) 天 祖 彦 火 尊、娉^{ニギハヤヒ}海 神 之 女 豊 玉 姫 命、生 彦 瀲 命。誕 育 之 日、海 浜 立^{ミナトタテ}室。
(14・彦火命と彦瀲命)

天祖である彦火命が海神の娘である豊玉姫命を妻としてお迎えになって、彦瀲命をお生みになった。それに続く「誕育之日」を諸訓がどう訓んでいるかを見ていこうとしているのである。そこで、その第二文の校本を紹介することとする。

校注 誕育^{ひだ}したてまつる日に、海浜^{うみへた}に室^みを立てたまひき。

新撰 誕育^{ひだ}之日、海^{あま}の浜^{へた}に室^みを立つ。

新講 誕育^{ひだ}し奉^もるの日、海浜^{うみへた}に室^みを立つ。

精義 誕育^{アレ}マセル日、海浜^{うみへた}二室^{ニミヤ}ヲ立ツ。

新註 ひとしまつりたまふとき、うみべにうぶやをたてたまひき。

「誕育」は純粹の漢語で、『角川大辞源』には、「後漢・殤帝紀」に用例がある、という。そこには、〈やしないそだてる〉意とあって、そもそもが、他動詞の漢語である。それを、「ひたす」という他動詞の和語で訓んでいるわけで、ふさわしい訓みと感じとれる。その「ひたす」は、ここでも、西宮校注がそう訓んでいるように、「ひだす」ともいわれる。「日足す」が語源かとされ、池辺新註、また、飯田新講も安田・秋本新撰も、その、清音「ひたす」で訓んでいる。

ところが、溝口精義は、そこを、彦瀲命を動作主体として、自動詞「ある」〈生まれる〉意に転換させて訓んでいるのである。したがって、その「あれ」の下に、尊敬の補助動詞「ます」を添えることになるのは、当然の結果であろう。

原文に見る漢語「誕育」を他動詞「ひたす」「ひだす」で訓むとなると、謙讓の補助動詞「まつる」「たてまつる」の類が必要となり、それらを補読して、客体として想定される彦瀲命に敬意を示す表現が構成されることになる。ただ、この場合、動作主が、父の彦火命ということになるので、その点に配慮すると、池辺新註の「ひとしまつりたまふ」のような、二方向の敬語が補読されることになるのである。彦火命にも彦瀲命にも、敬意を表した訓みである。

安田・秋本新撰は、「ひたしたまふ」というのだから、動作主である彦火命だけを遇していることになる。謙讓の補助動詞を訓み添えることのできる他動詞で訓んでいて、尊敬の補助動詞をしか付けていないのには、登場人物に対する、何らかの思い入れなどがあつたのであろうか。

そのような登場人物への思い入れなどと、その動作主を変えてまで、多くが他動詞で訓むところを、自動詞「ある」で訓んだ精義の姿勢と、関わりあるかなどと思うことは、無用の詮索であらうか。訓読の表現には、さしてこだわることなく、本文の理解は進められていたのであろうか。

六 その動詞が要求する格助詞

本節においては、動詞と、それに上接する格助詞との関係をみていくこととする。この問題については、『動詞の格支配』などと呼ばれたりもするが、^{〔注16〕}その術語については、別の理解もあつて、単純に、『二格かヲ格か』ぐらいにしておくほうがよいかもしれない。^{〔注17〕}筆者は、古く、「背く」用語致一特に上接格助詞を「に」の問題―執筆の折、その基礎作業を通して、この種の現象への興味をかき立てられた。そして、再び、今回に同じく、神道文献『倭姫命世記』の付訓に注目した際、「(5)二格かヲ格か」という小節を設けて、「征つ」「随ふ」「絶ゆ」「復す」「堺ふ」などの上接助詞に、二格・ヲ格が存在することを取り上げて論じたことがある。

この現象への注視を、一時期続けていた岩下裕一氏は、その著『意味』の国語学^{〔注18〕}のなかに、関連する、いくつかの論考を収めている。そのⅡ「語誌編」の第一章「動詞と格」には、「念ず」「案ず」「観ず」「信ず」「感ず」「あらはす」「現ず」「頼む」「横たふ」「存ず」などに及ぶものとして論じている。

そこで、小稿においては、この『古語拾遺』の訓読文のなかに見られる、その二格・ヲ格の両助詞を上接させる動詞について取り上げ、整理していくこととする。

× × ×

その一組が、「酬ゆ」である。

(16) 然 則、至 於 録 功 酬 庸、須 応 同 預 祀 典。^{〔34・歴史の回顧〕}

右の「然」字は、「然れば」と訓んで、それまでに述べてきている、天孫降臨以来の功績記事を受けて、建国時代に功績を挙げているのだから、というように解する接続詞である。だから、その功績を記録し、その功労に報いるということになったら、それらの神々の社は、国家的な祭典に關係してよいはずだ、といっているところである。以下に、その校本を引くこととする。

校注	然れば、功を録し	庸を酬いたまふに至りては、
新撰	然れば則ち、功を録し	庸を酬ゆるに至りては、須らく
新講	然れば則ち、功を録し	庸を酬ゆるに至りては、須らく

精義 然レバ則チ、功ヲ録シ 庸ニ酬ユルニ至リテハ、須ク応ニ

新註 しければ則 そのいさをしるしたまひて、そのいたはりにむくはしたまふとならば、

校 同じく祀典に預るべし。

撰 同じく祀の典に預るべし。

講 同じく祀典に預る須くして、

精 同じく祀典に預ルベシ。

註 おなじくらいでむにあづかるべきを、

「酬」字を、「むくはす」という、サ行四段動詞にしてしまっている池辺新註だが、二格で「…にむくはし」と訓んでいる。溝口精義も、二格で「…ニ酬ユル」である。それに対して、他の三書は、いずれもヲ格である。飯田新講も安田・秋本新撰も、「…を酬ゆる」である。西宮校注は、その「酬ゆ」の行為主体として想定される「国家」とか「朝廷」とかに向けての敬意を表す姿勢をもって訓んでいる。「…を酬いたまふに至りては」としている。そのように、いずれにしても、二格とヲ格とに訓み分けられていたのである。

「むくゆ【報ゆ・酬ゆ】」が二格・ヲ格をとることについては、広く認識されているところでもあつて、小学館『古語大辞典』の該項目の「語誌」欄には、次のような記事がある。

○現代語の「報いる」は格助詞「に」をとるが、中古のころには「…を報ゆ」がむしろ一般であつた。(以下、略)

その、右の記事から考えて、刊行年には関係なく、いや、むしろ、刊行年の新しいもののほうが、古典語の原則に照らして、望ましい訓み方をしている、ということになりそうである。新講／新撰／校注のほうが、中古のころの語法に適う訓みということになるようである。

× × ×

次に取り上げるのは、「預かる」である。

そもそも、「預かる」は、力行下二段他動詞「預く」の自動詞形である。その「預く」がラ行四段化したのが、自動詞「預かる」である。その一方に、同じく上代から存在する他動詞「預かる」をも見るが、〈関与する〉語義と〈管理する〉語義とに、明確に意味分化していたものと見ることができ。そして、その〈関与する〉系語義群のものだけが、「…に預かる」形を見せるものようである。小学館『古語大辞典』の、「あづかる【与る・関る・預かる】」の、これも、その「語誌」欄に、次のようにある。

○「…にあづかる」の形で用いられる自動詞の用例は、中古では、一般に漢文訓読資料にみられ、和文には極めて少ない。(以下、略)

こども、署名なしの記事ではあるが、その参考文献として、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会・昭和三十八年三月)を紹介してくれてある。その「…預かる」を、本節の、第一項目「酬ゆ」の用例として引いた(16)の本文のなかに、つい、さきほど、見てきて

いたのである。西宮校注が「同じく祀典に預るべし」と訓んでいるところで、その「…にあづかる」については、五書とも異同がないのである。ところが、次の「預」字は、池辺新註や安田・秋本新撰のように「あづく」で訓むものは別として、「あづかる」と訓んでいながら、ヲ格をとっていたのである。

(17) 而、造_レ伊勢宮_ヲ及_レ大嘗_ヲ由紀・主紀宮_ヲ、皆不_レ預_二齋部_一。(38・遺りたる四)

校注 而るに、伊勢の宮_{のみや} 及_{また} 大嘗の由紀・主基の宮を造るときに、皆 齋部を

新撰 而るを、伊勢宮_{のみや} 及び大嘗の由紀・主基の宮を造るときに、皆、齋部を

新講 而るに、伊勢の宮_{のみや} 及び大嘗の由紀_{のゆき} 主基の宮_{のみや}を造りまつるに、皆、齋部_{のいみべ}を

精義 而ルニ、伊勢宮_{のみや} 及_{また} 由紀_{のゆき} 主基ノ宮ヲ造ルニ、皆 齋部ヲ

新註 しかるにいせのかむつみやまたおほにへのゆきすきのみやをつくりつかへまつるに、みな いみべを

校 預らしめず。

撰 預けず。

講 預_{あづ}からしめず。

精 預_{あづ}ラシメズ。

註 あづけたまはず。

新註や新撰のように、「あづく」で訓むのだったら、他動詞であるのだから、格助詞「を」を上接させて当然である。しかし、溝口精義も飯田新講も、そして、校注も、〈管理する〉系語義とは思えない「預かる」で訓みながら、なお、格助詞「を」を上接させているのである。伊勢の皇大神宮のご造営の時にも、大嘗祭の由紀殿・主紀殿のご造営の際にも、齋部氏に關与させてくれないことが残念だ、といっているところである。

ここで、さらに、その「預かる」について観察しなければならないことは、精義／新講／校注のいずれもが、「しむ」を補読している点である。「預からしむ」で、一語的なものとして訓んでいるのである。自動詞化した「預かる」に使役の助動詞「しむ」を添えた結果として、そこに格助詞「を」が採用された理由があるかに思えてくるのである。

筆者には、その「…を預からしめず」が、どうしても抵抗ある表現として従えなかった。どうしても、「皆、齋部に預からしめず」と訓めてしまうのであった。そう訓んだうえで、先人の訓読文のなかに、その類を見ることがないのはどうしてか、など、新しい疑問として受けとめている。

ただ、そういう疑問は疑問として、この「…に預かる」が「…預からしめず」となる傾向は徹底していたようで、第四十一段に、その恰好の用例を見ることができたのである。

(18) 凡、奉幣諸神者、中臣・齋部、共預其事。而、今大宰主神司独任中臣、不預齋部。(41・遺りたる七)

もはや、「…に預かる」と「…を預からしめず」とについて、その解説の必要はない。校本によって、それが徹底していることを確認するだけで十分であろう。

校注 凡て、幣を諸神に奉ることは、中臣・齋部、共に其の事に預れり。

新撰 凡て、幣を諸神に奉ることは、中臣・齋部、共に其の事に預かる。

新講 凡そ、幣を諸神に奉ることは、中臣・齋部、共に其業に預かる。

精義 凡ソ、幣を諸神に奉ルニハ、中臣・齋部、共ニ其ノ事ニ預ル。

新註 すべて、もろもろのかみにみてぐらをたてまつるは、なかとみ、いみべ、ともにそのことにあづかれり。

校 而るに、今、大宰の主神司は、独り中臣を任して、齋部を預らしめず。

撰 而るを、今、太宰主神司に独り中臣を任して齋部を預けず。

講 而るに、今、太宰の主神司をば、独り中臣を任して、齋部を預からしめず。

精 而ルニ、今、太宰ノ主神司ニ、独、中臣ヲ任シテ、齋部ヲ預ラシメズ。

註 しかるに、いま、おほみこともちのかみづかさ、ひとりなかとみをめしてあづけたまはず。

× × ×

以下に、同一動詞に上接する格助詞が、「に」とも「を」とも訓まれてきている用例を掲げることとする。
その一は、「齋」字を「いつく」と訓んだ場合の用例である。

(19) 泊于卷向玉城朝、令皇女倭姫命奉齋天神。(23・垂仁天皇)

右の本文の返り点は、あるいは、「令皇女倭姫奉齋天神。」ということになるうか。とにかく、早速に、その校本を引くこととする。

校注 卷向の玉城の朝に泊びて、皇女倭姫命をして

新撰 卷向玉城朝に泊びて、皇女倭姫命をして

新講 卷向の玉城の朝に泊びて、皇女・倭姫命をして

精義 卷向玉城ノ朝ニ泊ンデ、皇女、倭姫命ヲシテ

新註 まきむくの たまきのみやにあめのしたしろしめしけるみよになりて、ひめみこ やまとひめのみことに

校 天照大神に齋^いき奉^{ほう}らしむ。

撰 天照大神を齋^いき奉^{ほう}らしむ。

講 天照大神を齋^いき奉^{ほう}らしむ。

精 天照大神ヲ齋^いキ奉^{ほう}ラシム。

註 あまてらすおほみかみをいつきまつらしめたまひき。

右に明らかなように、それに先立つ四書ともに「天照大神を齋^いき奉^{ほう}らしむ」と訓んでいるところを、西宮校注だけが二格で訓んでいるのである。校注の補注の一〇六において、「倭姫命をして天照大神を奉^{ほう}齋^いせしめるといふ、伊勢神宮の起源につき記されている」とあるだけに、いよいよ、その「に」に悩まされるのである。実は、それほど悩まされたところなのに、筆者もそこを「に」としてしまっていて、いま、猛省しているところでもあるのである。

その二は、「纏」字を「まく」と訓んだ場合の用例である。

(20)〔仍、以、秦氏所貢絹、纏^{マク}祭^{マツル}神^{カミ}釵^{ツカ}首^{カビ}。〕(28・雄略天皇)

雄略天皇の御代のことを述べた、その注記部分である。大秦の地名起源ともなる話のところ、秦氏が朝廷に献上した絹を用いて、神を祭る時に剣に纏^{マク}くか、剣を纏^{マク}くか、そういう趣旨のことを述べているところである。その校本を、以下に紹介する。

校注 仍^{より}りて、秦^{はたのうぢ}氏の貢^{たま}る絹^{きぬ}を以^もて、神^{かみ}を祭^{まつ}る剣^{つるぎ}の首^{つか}を纏^{マク}く。

新撰 仍^{より}て、秦^{はたのうぢ}氏の貢^{たま}る所^{ところ}の絹^{きぬ}を以^もて、神^{かみ}を祭^{まつ}る剣^{つるぎ}の首^{つか}に纏^{マク}く。

新講 仍^{より}りて、秦^{はたのうぢ}氏の貢^{たま}る所^{ところ}の絹^{きぬ}を以^もて、神^{かみ}を祭^{まつ}る剣^{つるぎ}の首^{つか}に纏^{マク}く。

精義 仍^{より}ツテ、秦^{はたのうぢ}氏ノ貢^{たま}ル絹^{きぬ}ヲ以^もテ、神^{かみ}ヲ祭^{まつ}ル剣^{つるぎ}ノ首^{つか}ニ纏^{マク}ク。

新註 かれ はたうぢひとのたてまつれるきぬもて かみにまつるつるぎのたがみをまくこと、

ここにいう「首」とは、その剣の柄、ということである。絹を、その剣の柄に纏^{マク}くというのか、絹を用いて、その剣の柄を纏^{マク}くというのか、そういうことでの「に」か「を」か、というところである。

そういうわけで、以上の二か所の「に」と「を」との問題は、動詞が要求する格助詞の現象とは違うものだったのである。

次は、その同一動詞が、自動詞としてのそれか、他動詞としてのそれかによって、訓み分けられているかに思える用例である。

(21) 是以、中臣・齋部二氏、俱掌祠祀之職。媛女君氏、供神樂之事。

(21・国家祭祀と氏族)

「供」字の訓は、「つかへまつる」が一般、「つかまつる」は、それが「つかうまつる」を経て変化したものである。(お仕えもうしあげる)意は自動詞、(何かを)してさしあげる)意は他動詞である。もちろん、「仕ふ」に謙讓の補助動詞が付いて成立したのであるから、自動詞に始まるものである。具体的な動作を意識したところから、他動詞用法例を見せることになったのであろう。「に」か「を」かは、その、動詞の語義と関わっているように見てとれる。

校注 是を以て、中臣・齋部の二氏、俱に祠祀の職を掌る。

新撰 是を以て、中臣・齋部二の氏、俱に祠祀之職を掌る。

新講 是を以て、中臣・齋部の二氏、俱に祠祀之職を掌り、

精義 是ヲ以テ、中臣・齋部ノ二氏ハ、俱ニ祠祀ル職ヲ掌リ、

新註 このゆゑに なかとみ いむべのふたうち、あひともにまつりのわざをつかさどり、

校 媛女君氏、神樂の事を供へまつる。

撰 媛女君氏、神樂の事を供つる。

講 媛女君の氏、神樂の事に供へまつる。

精 媛女君ノ氏ハ、神樂ノ事ニ供ヘマツル。

註 さるめのきみのうちびと、かみあそびのわざにつかへまつる。

「神樂の事」、つまり、神樂という歌舞の技芸を考えたとき、現代人は、「…を供へまつる」という他動詞とむすびつけたくなるように思える。安田・秋本新撰と西宮校注とは、そう訓んでいる。

いま一点、対句仕立てとなっている、前文の「…を掌る」との関係も考えられてくる。「祠祀の職を掌る」と「神樂の事を供へまつる」という、対句的な受けとめ方である。

『古語拾遺』訓読文のなかで、以下に紹介するのは、「に」か「を」かで揺れる箇所が、一文中に四か所ある用例である。それらは、その、動詞相

当の漢字が、多様な訓みを見せるものでもあったのである。

(22) 故、聖 皇 登^レ極、受^レ終 父 祖、類^a 于 上 帝、禋^b 于 六 宗、望^c 于 山 川、徧^d 于 群 神。

(36・遺りたる二)

右の a「類」・b「禋」・c「望」・d「徧」の各漢字は、西宮校注では、すべて、「まつる」と訓まれている。中国古典に典拠ある、祭り方をいう動詞で、aは〈常例の祭りに似せて臨時に祭る〉意、bは〈煙を天に立ちのぼらせて祭る〉意、cは〈遠くの山川を臨んで、柴を焚き、煙を上げて祭る〉意、dは〈あまねく祭る〉意、だという。

ただ、その、a・b・c・dの各漢字には、他の字義もあり、それに見合った和語動詞に当てて訓むことは十分に考えられ、また、音読して漢語サ変動詞として受けとめることも、これまた、十分に考えられる。その結果としての、「に」と「を」とだったのである。

校注 故、聖皇の登^{あまのミコ}極^{きりぎりす}して、終^{はり}を父祖^{おはむち}に受けたまひ、

新撰 故に聖皇^{あまのミコ}、登^{あまのミコ}極^{きりぎりす}して、終^{はり}を父祖^{おはむち}に受け、

新講 故れ聖皇^{あまのミコ}、登^{あまのミコ}極^{きりぎりす}して、終^{はり}を父祖^{おはむち}に受け、

精義 故レ、聖皇^{あまのミコ}ノ登^{あまのミコ}極^{きりぎりす}ハ、終^{はり}ヲ文祖^{ぶんそ}ニ受クルナリ。

新註 かれ すめらみこと あまつひつぎしろしめすは、そのみおやのみことのひつぎをしろしめすことになもありける。

校 上帝^{あまつかみ}を類^{ちゆ}り、六宗^{むつのかみ}を禋^{まつ}り、山川^{さんせん}を望^{まつ}り、群神^{ぐんがみ}を徧^{まつ}りたまふ。

撰 上帝^{あまつかみ}に類^{ちゆ}て、六宗^{むつのかみ}に禋^{まつ}し、山川^{さんせん}に望^{まつ}みて、群神^{ぐんがみ}を徧^{まつ}くす。

講 上帝^{あまつかみ}を類^{ちゆ}み、六宗^{むつのかみ}を禋^{まつ}り、山川^{さんせん}を望^{まつ}ひ、群神^{ぐんがみ}を徧^{まつ}くす。

精 上帝^{あまつかみ}二類^{ちゆ}シ、六宗^{むつのかみ}二禋^{まつ}シ、山川^{さんせん}二望^{まつ}シ、群神^{ぐんがみ}二徧^{まつ}ス。

註 さてあまつかみにつかみもろのかみたちをもあまねくまつりたまひてあまつひつぎしろしめすをまをさしめたまふ。

天皇が皇位をお継ぎになるに際して行われる、その祭りについて述べているところである。ここは、その漢字を、どう訓むかが先行する問題である、といえよう。

七 注視していききたい、その他の語法

本節をもって、小稿を閉じることを前提に、以下、その『注視していききたい、その他の語法』として、手短に紹介していくこととした。

その一は、前置詞性動詞^{〔注20〕}「以てす」といわれる、「以てす」という訓み方である。「春夜宴桃李園」に現れる「況陽春招我^レ以^レ煙景、大塊飯我^レ以^レ文章^ツ」の、「以^レ」である。

その「以てす」、筆者は、『古語拾遺』の訓読としては、日本古典語としては音便化させない「以ちてす」と訓んでいききたいとする、その「以ちてす」が、しばしば用いられているのである。例えば、「科^レ之以^レ千座置戸^一」(西宮校注^二之に科するに千座の置戸を以てし^一) (8・素神の追放) などである。

ところが、次例のように、「命以^レ小刀^一」(西宮校注^二命に小刀を以てす^一) (31・天武天皇)とあって、先行する動詞なしに、そう訓んでいる用例を見るのである。「命に」の「命」は、動詞として訓まなくてよいのだろうか、そこが、筆者の疑点である。池辺新註と校注が名詞に訓んでいる、その是非を考えていこうと思っているのである。

その二は、私に、提題の「は」^{〔注21〕}と呼んでいる、その「は」の用法である。「天罪者、上既説訖(西宮校注^二天罪は、上に既に説き訖りぬ^一)」(21・国家祭祀と氏族)とある、その「天罪は」の「は」は、天の罪については、とでもいったらいいところであるが、次の「国罪者、国中人民所犯之罪(西宮校注^二国罪は、国中の人民の犯せる罪なり^一)」(同上)の「国罪は」の「は」は、国つ罪とは、というように、「とは」と訳出したらよいものである。その「とは」は、定義や命題などの主題を表すもので、その「とは」に通う「は」なのである。

とにかく、この原文に見る「者」字を、訓読において「は」と訓む、その「は」に注視していききたいと思う、ということなのである。一般には「とは」といわれるるころを「は」と訓む、その「は」についての観察である。

実は、その「とは」については、右文書院・文部省検定教科書『古典Ⅱ』(加藤是子・坂本右・田島毓堂・中村幸弘)の指導資料の「教材こぼれ話編」^{〔注22〕}(平成八年四月十月初版)に取り上げたことがあるのである。以下に、再掲することとする。

「南冥とは、天地なり。」も、「齊諧とは、怪を示す者なり。」も、その「……とは」は、どのようなはたらきをしているのであろうか。現代では、きわめて自然にしばしば用いられるものと見てよいようだが、和文の中には、どうも見えないようである。主格を示すというのはためらわれるが、「……は」や「……も」が担う主題の提示をしているといつてよからうか。松下大三郎『標準漢文法』では、その「とは」を「といふは」の意であるとしている。同書一九頁に詳しい。ただ、国語辞典の類は、この「……とは」そのものについて、いまだ注目しているものがない。『日本国語大辞典』の「と」の項、また、「とは」の項、いずれを見ても、この用法について触れてくれない。『大辞林』『大辞海』にわずかに見るだけである。

莊周『莊子』(「逍遙遊」)の一部「北冥有^レ魚」に現れる「南冥者、天地也。」「齊諧者、志^レ怪者也。」の「トは」について、「……とは」は、主題の提示か」として述べたものである。漢文訓読の「とは」についても、ほとんど注目されていないようである。

そして、この『古語拾遺』、溝口精義だけが、そこを、「国ツ罪トハ」と訓んでいたのである。調査してみたくなる問題である。

続いて、その三も、同じく「は」である。「然則、御巫之職、応任旧氏」(西宮校注「然れば、御巫の職は、旧の氏を任すべし」)。(43・遺りたる九)の「は」である。そこは、もちろん、そうであるので、御巫の職には、旧来の(由緒ある猿女)氏を使用して当然である、というように解されてよいところである。したがって、その「御巫の職は」は、「御巫の職には」ということで、格助詞「に」を訓み添えない訓みである。

そこを、溝口精義だけが、「御巫ノ職ニハ」というように、その「に」を訓み添えていたのである。精義は、とにかく、読者には理解しやすい訓みを積極的に取り入れていた、ということができそうである。

その用例は、「然則、神祇官神部、可_レ有_二中臣・齋部・猿女・鏡作・玉作・盾作・神服・倭文・麻統等氏_一(西宮校注「然れば、神祇官の神部は、中臣・齋部・猿女・鏡作・玉作・盾作・神服・倭文・麻統等の氏有るべし」)。(44・遺りたる十)にも見ることができる。「神祇官の神部は」は、「神祇官の神部には」、さらにいうと、「神祇官の神部としては」、また、「神祇官の神部のなかには」などとも理解していけるところである。ここも、精義は、「神祇官ノ神部ニ」と訓んでいる。

とにかく、係助詞「は」には、問題が多い。そのうちの、格助詞「に」を内包して単独で用いられている「は」が、訓読文のなかではどうかであるのか、これも、ちょっと見てみたい、ということなのである。

さらに、その四として、「然則」は、「しかれば」か「しからば」かが、挙げられる。その用例は、さきの、「然則、御巫之職、…」。(43・遺りたる九)／「然則、神祇官神部、…」。(44・遺りたる十)において見てきたところである。「則」字の上であるから、已然形＋接続助詞「ば」が常識的な訓みであろうし、他のすべてが、そう訓んでいるところを、溝口精義だけは、「然ラバ則チ」と訓んでいたのである。

「然則」は、この『古語拾遺』のなかに、他に、「然則、至於録功酬_レ庸、須_二応同預_一祀典」。(34・歴史の回顧)／「然則、奉_二幣之日、可_レ同致_一敬」。(35・遺りたる一)／「然則、天照大神者、惟祖惟宗、尊無_二与_一」。(36・遺りたる二)／「然則、三氏之職、不_レ可_二相離_一」。(37・遺りたる三)などに現れる。そこで、精義の、その部分を見ると、第三十五段落は、同じく「然ラバ則チ」であったが、なんと、第三十六段落・第三十七段落においては、「然レバ則チ」と訓んでいたのである。

気になる、その五は、同じ動詞を重ねた間に入れて動作の継続を表し、意味を強める、格助詞の「に」である。その、代表的な用例として引かれるのは、「天の香山の五百津真賢木を根こじにこじ(根許士爾許士)て」(古事記・上・天照大神と須佐之男命)である。そこで、『古語拾遺』の「齋部官、率_二御木・鹿香_一二郷齋部、伐以_二齋斧_一、掘以_二齋鉏_一」。(38・遺りたる四)の「掘」字を訓むのに、その変形を用いて訓む訓読がある。ただ、それは、その「に」を「の」にして、語頭に接頭語「さ」を冠して、さらに全体を「にす」で受けてサ変動詞にしている、といえる。溝口精義の「掘ニスルニ」と安田・秋本新撰の「掘にするに」とである。いや、新撰は、その「の」を落としてもいたのである。

その、同じ「掘」字を、同じように、「の」を介在させて訓んでいる用例が他にもあったのである。「其物既備、掘_二天香具山之五百箇賢木_一、而上枝懸_二玉_一、中枝懸_二鏡_一、下枝懸_二青和幣・白和幣_一、令_二太玉命捧持称讃_一」。(6・日神の石窟幽居)の「掘」字である。新註は「さねこじのねこじて」、精義は「掘」、新講も「掘」、校注は「掘じて」と訓む。新撰は「掘」というように、「の」の助詞を介在させたうえで、さらに、いま一度、

「に」助詞も入れて訓んでいるのである。いずれにしても、同一動詞の間に「に」助詞を入れた表現の変形である。

その「に」は、同じく上代の『万葉集』にも見られるが、中古和文の用例、「たてこめたる所の戸、すなはち、ただ、開きに開きぬ。」(竹取物語・かぐや姫の昇天)／「ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。」(源氏物語・夕顔などで馴染んでいるからか、印象として、漢字文献の訓読文とは、結びつけにくいようにも思えてくる。「仍、解除其罪、逐降馬。」(8・素神の追放)を飯田新講／安田・秋本新撰が「逐降りき」／「逐降」と訓んだり、西宮校注が「逐降ひき」と訓んでいるのは、「神やらひやらひ(夜良比夜良比)賜へり。」(古事記・上・伊耶那岐命と伊耶那美命)を受けていることが明らかなのだが、この種の訓読文をも、いわゆる漢文訓読文のように感じてしまってもいいのか、どうも馴染まない表現のように思えてしまっているのである。

さらに、それは、六項めということになるわけだが、「中臣専権、任意取捨。」(33・天平年中)の「取捨」を、池辺新註／溝口精義が「とりもし捨てもし」／「取りモシ捨テモス」と訓み、西宮校注が「取りみ捨てみす」と訓んでいるのは、驚くばかりである。前者の「取りもし捨てもす」の「し」や「す」は、係助詞「も」の上の動詞の意味をそれぞれ受けて、並立関係を構成している補助動詞用法の「す」だったのである。(注23)「起きもせず寝もせず夜をあかしては春のものとてながめ暮らしつ」(古今和歌集・13・恋三・六一六・在原業平)の「せ」と同じ用法のものであったのである。後者の「取りみ捨てみす」の「…み…み」は、動詞、または助動詞「ず」の連用形に付いて、重ねて用いる、接尾語の「み」である。動作が交互に行われることを表す「…み…み」である。「降りみ降らずみ」の「…み…み」であり、「生駒の山を見れば、曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やまず。」(伊勢物語・六十七段)の「…み…み」である。

いずれにしても、どちらかというところ、和文系の表現が採用されているのである。その点に驚いたのである。

さらに、さらに、七項めになるが、ナリ活用形容動詞で訓んでいるところが、いくつか見られる、ということである。まず、「故、令人民夭折、青山変枯。」(2・天地開闢)の「夭折」の訓みである。使役文のなかに用いられており、池辺新註／溝口精義／安田・秋本新撰は、「あからさまにし」／「夭折二」／「夭折にして」というように、漢語「夭折」を「あからさまに」で受けとめ、飯田新講／西宮校注は、「夭に折なしめ」というように、漢語「夭折」を「あからさまにしぬ」で受けとめている。形容動詞「あからさまなり」は、『日本書紀』の古訓や中古の古辞書のなかに、その存在が認められるが、いわゆる連用形の「あからさまに」としてである。大方が〈突然〉(忽ちに)を意味する、その「あからさまに」形だけで「夭折」の意を担ったことや、「あからさまにしぬ」という表現を成立させたことにも、関心が寄せられる。それは、何よりも、そもそもが、上代には僅少例をしかみせない形容動詞だからである。加えて中古語としてのそれが、「出づ」「参る」「渡る」など、外出や移動の意を表す動詞を修飾するものもつばらだつたからである。とにかく、上代語として、その用法は理解できるものの、「死ぬ」を修飾するのが、やはり意外だつたからである。

「仍、従其数、苗葉復茂、年穀豊稔。」(46・御歳神)の熟字「豊稔」は、池辺新註の「ゆたかなりき」と飯田新講の「豊かに稔れり」とが、ちよつと別の訓みをしていても、他は、溝口精義／安田・秋本新撰／西宮校注とも、「豊稔ナリ」／「豊稔なり」である。筆者は、表記としては「豊稔かなり」としたいが、とにかく、いずれも、「ゆたかなり」である。上代語形容詞「ゆたけし」を採用するものなどは、逆に、まったく見られなかった。

「但、中古尚朴、礼楽未明。」(47・跋)の「朴」字も「明」字も、ともに、「すなほに(して)」と「あきらかなら(ず)ざりしかば」というように、当然、そう訓める形容動詞で訓まれている。「方今、聖運初啓、照堯暉於八洲、宝曆惟新、蕩舜波於四海、易鄙俗於往代、改秕政於当年。」(同上)の「新」字も、新註／校注は、「あらたに」／「新に」という、連用形中止法で訓み、精義／新講／新撰は、「新ニシテ」／「新にして」／「新たにして」というように、接続助詞「して」を添えて訓んでいる。振り返って、(3)に引いた用例中の「新」字は、使役表現と関わる、別の問題のあるところだったが、そこは、すべてが「あらたに」であった。「古語、事之甚切、皆称阿那。」(8・素神の追放)の「切」字も、「愚臣広成、朽邁之齡、既逾八十、犬馬之恋、且暮弥切。」(跋・47)の「切」字も、また、形容動詞に訓まれるところである。前者について、新註／精義／校注が「せちなるを」／「切ナルヲ」／「切なる」であるのに対して、新講／新撰は「切なるをば」／「切なる」と訓んでいる。後者について、新註／精義／校注が「せちなり」／「切ナリ」／「切なり」と訓んでいるのに対して、新講は「切なり」、新撰は「切なり」である。そのように、「切」の字音語「切なり」が採用されていることは、和文のなかに定着した、その「せちなり」を採用した、ということなのである。そして、その一方に見られる「ねもごろなり」／「ねもころなり」、「しきりなり」／「ねむごろなり」は、その「せちなり」が字音語であることに気づいた結果の訓みのように思えてもくるのである。

最後に、このように形容動詞に執拗にこだわったのは、その形容動詞が、上代にあつては、なお未発達段階にあるはずだった、ということからの確認でしかない。現在残る『古語拾遺』の訓読語は、いつの時代の言語を採用しようといっていたのか、そんな思いからの確認である。

× × ×

なお、机上に整理されないまま残っているカードには、纏まらないメモが幾つか読みとれる。「無」字は、「無からむ」だけでなく、時に「無けむ」とも訓まれている。「聞」字も、「聞からむ」の一方で、「聞けむを」とも訓まっていた。

疑問文に見る「応」字の訓みは、同じ推量でも、「…む(や)」がよいのか、「…べき(か)」がよいのか、どうなのだろう。文末の「耶」字だけでは、「か」とも「や」とも、判断できないようである。

上に「蓋」字がある場合の、その文末は、「なり」でよいのか、「ならむ」がよいのか。「猶」字の文末は、「ごとし」か、「ごとくなり」か。また、その「ごとし」に、「む」を添えて、「ごとけむ」と訓んであったとしたら、それは、果たして、認めてよいのであろうか。確か、「ごとし」の活用形は、「ごとく」「ごとし」「ごとき」の三形に限られていたはずである。

日本語漢字文献を、先人は、どう訓んできたのか。その訓み方の原則が、いま、待たれてならない。口伝えの訓みを祖述してきた、その諸訓を整理したうえで、日本語漢字文献の訓読文法の体系化を期待して、攔くこととする。

【注】

はじめに

〔注1〕『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「古語拾遺」の項の記事（秋本吉徳執筆）など。

〔注2〕『研究資料日本古典文学②』（明治書院）「古語拾遺」の項の記事（井口樹生執筆）など。

〔注3〕いま、改めて確認をしたわけではないが、『国書総目録』を見ても、版本の書き入れはあっても、直ちに、通読を容易にしてくれるものはないようである。その意味で、小稿が対照諸訓の一つに数える、池辺真樸著『古語拾遺新註』は、すべてを仮名書きしてあって、恐らくは、待望の一書であつたろう。なお、そうはいっても、近世においては、この『古語拾遺』は、相応に版本として刷られており、普及していたようである。たまたま、青木紀元・拙著『古語拾遺を読む』の監修者・氏に、千葉県香取市（当時は、佐原市）の伊能忠敬記念館にお誘いいただいた折、その所蔵書籍目録に、『古事記』はなく、『古語拾遺』があつたのである。コンパクトであるところから、古代史を知る書物として、その存在意義もあつたのか、などとお話くださったことがあつた。

〔注4〕諸稿徹次『大漢和辞典』を始めとして、身辺の漢和辞典によって確認したうえで、私に施した語釈ではある。

〔注5〕拙編者『ベネッセ古語辞典』（ベネッセコーポレーション）の「事典部」の該項には、「中止法による対偶（文節としては対等語）表現のうち、下位の対等語に付く助動詞などが、上位の対等語をまで受ける用法。」と定義してある。

二

〔注6〕極めて一般的な、さらにいえば通俗的な漢文法の知識による印象でしかない。

〔注7〕これもまた、一般的な漢文法の知識による印象である。

〔注8〕受身の表現は、中国文の影響で発生したものと論考か記事かを古くに読んだように思っているが、いま、周辺に該当するものが見当たらない。少なくとも、いま、筆者は、そう感じている一人である。

〔注9〕古辞書の古訓を登載してある、次の二辞典には、次のようにある。

○『学研漢和大辞典』には、「オク・セラル・タリ・トコロ・ミチ・ミモト」とある。

○『角川大辞源』には、その「中古」のところに、「コレ・セラル・タリ・トコロ・ノブ・ミモト・ラル」とある。

〔注10〕『角川大辞源』の「所」字の字義①のエに示される用法。

〔注11〕愛知大学／中辞典編纂所『中日大辞典 増訂第二版（大修館書店）』の該項に、「⑧すつかり。まったく。〔是夏天了〕すつかり夏になった。（以下略）」とあつた。菅原悟（西武台千葉高等学校教諭）氏の教授による。

三

〔注12〕『古語拾遺』を読むの二〇四ページから二一九ページまでに収められている。なお、杉浦克己氏『古事記』本文と『古語拾遺』（二〇〇六年一月三〇日「武威野文学」54）において、同上論文は詳細な研究として評価されている。

四

〔注13〕『ベネッセ古語辞典』「事典部」は「非情の受身」をカラ見出しにし、「受身表現」の項で、『日本語では、「にくきもの：硯すずりに髪の入りにすられたる」（枕・二八）など、無生物が主語となる受身表現は用例が少なく、「非情の受身」と呼んで区別したりする。』と説明してある。なお、小杉商一氏「非情の受身について」（『田辺博士古希記念 国語助詞助動詞論叢』（桜楓社・昭和五十四年八月二十八日刊）所収論文）は、旧来、欧文直訳体といわれていた、この表現について、日本古典の中の用例を多く拾い上げてくれている。

〔注14〕時枝誠記『国語学原論』（岩波書店・昭和十六年十二月十日発行）などに見るところである。なお、筆者も、「る」「らる」覚書（昭和五十九年三月三十日「國學院高等学校紀要」第十九輯）その後、平成七年十一月『補助用言に関する研究』（石文書院）に収録した）において、若干、その問題について考察を加えてみたことがある。

五

〔注15〕 たまたま、机辺にあった『岩波国語辞典 第六版』／『旺文社国語辞典 第九版』／『学研現代新国語辞典 改訂新版』などは、そのように、〈セン・うつす〉であった。拙編著『ベネッセ表現読解国語辞典』は、たまたまであろうか、〈セン・うつす・うつる〉を掲げてあった。表外訓の問題について考えさせられるところがあった。

六

〔注16〕 『ベネッセ古語辞典』『事典部』の「動詞の格支配」は、次のような記事となっている。

動詞のうちのあるものが、上接する格助詞を特定して要求する現象をいう。たとえば、「背く」は、現代は「親に背く」など、「に」格助詞に付くものに限られるが、古くは、「国王の仰せごとを背そまかば」(竹取・八)など、「を」格助詞に付くものが多かった。「恐る」もまた、「仰せに恐れて」(今昔・一三)と「罪を恐れて」(今昔・一七)とあって、「に」格をとる「恐る」は恐懼さうくを、「を」格をとる「恐る」は不安を表すものとされている。

〔注17〕 筆者自身、「背く」用語致 特に上接格助詞「を」「に」の問題―(『國學院高等学校紀要』第十輯(昭和四十三年十月)において、そこに示したとおりであり、さきごろの『倭姫命世記』の付訓「語法、敬語表現論」(『伝統と創造の人文科学』(國學院大學大学院文学研究科創設五十周年論文集)〔平成十四年三月三十一日発行〕においても、「(5) 二格かヲ格か」という見出しとしておいた。

〔注18〕 岩下裕一氏著『意味』の国語学(おうふう・平成十五年一月二十五日発行)のⅡ、「語誌編」の第一章「動詞と格」に、その調査結果と考察とを見る。

〔注19〕 小学館『古語大辞典』(昭和五十八年十二月十日発行)の「語誌」欄の記事には、多くが署名記事であるが、ここは、そうっていない。なお、『日本国語大辞典 第二版』(同じく小学館・二〇〇一年二月二〇日発行)の「むくいる」【報・酬】の「語誌」欄の(2)には、「:をむくゆ」か「:にむくゆ」かについては、古く格助詞「を」をとっていたが、平安後期以降「に」をとるようになった。」とある。

七

〔注20〕 この術語を、筆者は、昭和三十一年、初任校(千葉県立佐原第一高等学校)の図書館で初めて接した松下大三郎著『標準漢文法』(紀元社蔵版)から学ぶことができた。副詞性動詞の一つとして設けられていて、小稿本文に、続いて紹介する、李白の「春夜宴桃李園」序の、その本文を、生徒に徹底して理解させえた日

のことが忘れられない。いま、その後購入した同書で確かめると、四四五ページに、その用法についての詳説が見られる。

〔注21〕 「とは」といったら、いっそうよく理解できる、「は」である。その「とは」について立項してくれてある辞典は、『大辞林』だけであった時期があった。「正数とは0より大きい数をいう」という例文が挙げてあった。そして、その働きを、漢文では「者」が担っているのである。それを、「は」と訓んできているのである。ここで、注視しようとしているのは、その「は」である。

〔注22〕 古文編・漢文編とも、各一課ごとに一題ずつ、ちよつと触れてみたい事項を取り上げて、授業時の脱線話題として執筆したものである。なお、その教科書は、平成七年二月二十六日文部省検定済で、高等学校国語科用(142・右文・古II533)である。

〔注23〕 その用法の詳細については、拙稿「補助動詞「す」の論」(昭和四十九年七月十九日「國學院雑誌」897号第七十五卷第七号)その後、平成七年十一月「補助用言に関する研究」(右文書院)に収録した―を参照されたい。